

表 2

	男 性（歳）													
	16-	20-	25-	30-	35-	40-	45-	50-	55-	60-	65-	70-	75-	
1973 年	愛	快	利							正	正		愛 快	
1978 年	快	愛	利							正		快	愛	
1983 年	快	愛	利	愛	利					快	愛	快		
1988 年	快	愛		利	愛		利		愛			快		
1993 年	快	愛	利	愛	利	愛		利	愛	快	愛		快	
1998 年	愛	快	愛	利	利		愛					快		
2003 年	快		愛	利	愛				利		愛			
2008 年	愛	快	愛							快				
2013 年	快	愛	利	愛						快				

	女 性（歳）													
	16-	20-	25-	30-	35-	40-	45-	50-	55-	60-	65-	70-	75~	
1973 年	愛		利					愛						快
1978 年	愛				利			愛						快
1983 年	愛					利			愛					
1988 年	快	愛					利		愛			快		
1993 年	愛		利	愛			利	愛						
1998 年	快	愛												
2003 年	愛 快	利	愛											
2008 年	快	愛												快
2013 年	愛													

自分の目指す生活目標が四つのタイプのどれに最も近いか
(男女別・年齢別)

- 1 -

表 1

		時間的な見通し	
		現在に 重点を置く	未来に 重点を置く
社会的な 見通し	自己に 重点を置く	快	利
	社会に 重点を置く	愛	正

人は何に価値を置いて生きるか

【一】放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

メモ

- ア 四つのタイプのうち「正」を選ぶ人は男女ともに少なく、特に女性では、全ての年齢層において最も多く選ばれたことがない。
- イ 「利」のタイプを選ぶ人はこの四十年間で減少する傾向にあり、男女ともに、その前の回の調査と比べて増加したことはない。
- ウ この四十年間の傾向を見ると、「快」のタイプは、男女ともに若くて独身の人が多い年齢層と高齢者層から多く選ばれていると言える。
- エ 女性は男性に比べ「愛」のタイプを選ぶ人が多く、二〇一三年には、全ての年齢層において「愛」のタイプを選ぶ人が最も多くなった。

(2) (問題は放送で指示します)

(1) (問題は放送で指示します)

- ア 四つのタイプのうち「利」を選ぶ人は、「自分の欲求をすぐに満たす」ことに価値を置いて、「その日その日を自由に楽しく過ごす」ことを期待している。
- イ 未来より現在を重視する「愛」や「快」のタイプが全体として増加している理由は、豊かな生活を目指してまじめに努力することをきょう傾向の表れである。
- ウ 男性において、人生のそれぞれの時期に応じて目標が変化していることが明らかだったのは一九七〇年代だけであり、その後はそのような傾向は見られない。
- エ この四十年間の変化を見たとき女性が男性に比べて年齢別の目標が大きく変わらないのは、家族を中心とする生活目標が設定されているからだと考えられる。

- 2 -

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学生の征人は、同級生の孝俊や保生とともに天徳島で生まれ育った。天徳島は、羽田空港から飛行機で二時間半かかる本島から、さらにフェリーで三十分かかる小さな島である。この島は「神の島」と呼ばれており、何かを決める際、「おばあ」（年寄りの女性）たちを通して神様にうかがいを立てる風習が残っている。タオの父は学者で、天徳島の文化や歴史について調べるためにタオとともに東京から移住してきた。

「こんにちは。」

突然の声に、思わず肩が持ち上がる。振り向くと、そこにはタオがいた。驚いた。まったく気が付かなかった。

「飛び込み？」

捉えどころのない、なんの感情もないような表情で聞いてくる。

「あ、ああ、そうだよ。」

声が裏返ってしまった。A ケハイを察したのか、孝俊と保生が上体を起こす。

タオの姿を見て、孝俊が眉根を寄せた。保生は困り顔だ。タオは二人の様子におかまなしで、崖の先端まで行き、

「ここから飛び降りるの？ すごいなあ。」

と、質問なのかひとり言なのかわからない一本調子で言った。それから崖を見下ろして、遠くの家を見て、手をかざして空を見て、また海面に目をやるという動きを何度か繰り返した。

気まずいのはおれたちのほうだった。なにを話していいかわからないし、孝俊がイラついているのも伝わってきた。タオは暑いなあと言って、首に巻いたタオルでのかぶり頭と額の汗を拭いたりしている。

「お前もやってみ。」

突然、孝俊が口を開いた。

「え？」

「飛び込みだよ。簡単だよ。ここではみんなやってる。ここに住んでるなら、お前もやれ。」

タオは涼しげな表情で、どうかな、厳しいだろうな、と誰にともなくつぶやいている。

「やってみーって。」

「えー、やるな、孝俊。」

思わず声をかけた保生を、孝俊がにらむ。

「港のほうでよくやってただろ。同じさ。」

孝俊がおおる。確かに午前中にやった宗見港のほうの防波堤では、タオが飛び込みをしているのを何度か見かけたことがあった。タオは飛び込みよりも、シュノーケリングが好きな様子で、シュノーケルと足ひれを着けて、海面をバチャバチャと泳いでいるのをたまに見かける。この人間で、泳ぐときにシュノーケルや足ひれを着ける奴なんていないから、いやでも目立つ。

「飛び込んでみー。気持ちいいよ。泳げるんだろ。」

「いや、ぼくはあまり泳ぎは得意じゃないよ。フィンがないと無理だと思う。」

ああ、足ひれのことをフィンと呼ぶんだ、とおれはそんなことを思った。

「無理しないほうがいいよ。」

保生が言い、

「そうだよ、この高さはきついよ。やらん方がいいよ。」

と、おれも加勢した。海で無理をしてはいけないことは、身体がよく知っている。

「お前たちは黙れ。どうか、タオ。やらんのか。」

タオは少し考えるような素振りを見せてから、「やめておくよ。」と言った。

「港のほうで練習して、もっと泳げるようになったらいつか挑戦したい。」

「使えんな。だから東京人はダメなんだよ。」

タオは、意味がわからないといった顔で首をかしげた。① その表情でまた孝俊がイラついたのが見てとれた。

「ここ、何メートルあるの？」

「六メートルくらいじゃないか。」

と、おれは答えた。タオは崖の下に興味深そうに覗き込んでいる。

「高いなあ。」

しみじみと言う。

「高くない。やってみー。」

孝俊がタオの後ろに立った。

「足をここに掛けて、一歩進むだけ。」

タオが崖に足をかける真似をした。孝俊がもう一歩近づく。

「孝俊、やるなよ。わかってるよな。」

保生が少し大きな声を出した。おれは、まさかと思っていた。いくら孝俊だって、そんなばかな真似はしないだろうと。孝俊がほんの一瞬、おれたちのほうを見た。

「孝俊。」

保生が再度、声をかけた。その次の瞬間、孝俊がタオの背中にすっと手を伸ばしたのが見えた。

「やるなっ！」

保生の声と、タオの破裂音のような短い悲鳴が聞こえた。タオが手をばたつかせ、海に吸い込まれていくのがスローモーションのように見えた。

「タオッ！」

② 保生が叫ぶ。長い時間を感じられた。突然、盛大なしぶきが上がり、タオが浮かんで、また沈んだ。大きなしぶきが立つ。おぼれているのだ。

保生がすぐさま飛び込んだ。考える間もなく、おれも続いた。タオは無様に手足を動かして、必死に保生にしがみついた。

「タオ、大丈夫！ 落ち着け、落ち着け！」

タオは無我夢中で手足を動かす。完全にパニックになっている。このままでは、こっちまでおぼれてしまう。

「大丈夫やさ！ 落ち着け！」

おれもタオにしがみつかれて何度も顔が沈み、海水を飲んだ。鼻が痛い。目がしみる。

保生と二人で、なんとかタオの左右の脇に肩を入れ、必死で岩場まで連れて行った。

「タオ、大丈夫かっ。」

タオは激しくむせている。その顔は真っ青だった。眼球が泳いで白眼になった。

「タオッ！ しっかりしえ！」

タオはそのまま意識を失った。

「お前はなにをしてるかっ！」

孝俊は、父ちゃんに大目玉を食らい、おれと保生の前でガツンと二発ぶん殴られた。

今回のことはあつという間に知れ渡った。気絶したタオをどうしたらいいのかわからずに、大人たちを呼びに走ったから、当然といえば当然だった。

タオの意識はそのあとすぐに戻ったけれど、ひとつ間違えれば、大変なことになっていたかもしれないのだ。

なぜ一緒にいたのに止めなかったのかと、保生もさんざん父ちゃんに怒られ、おれも

母ちゃんにこつぴどく叱られた。

〈中略〉

翌々日、三人でタオのお見舞いに行った。タオはすっかり体調がよくなったのか、いつも通りの様子で、本を読んでいた。

「タオ、ごめんな。」

「本当にごめん。」

おれと保生は頭を下げた。孝俊は口をつぐんで、一緒に頭を下げてただけだった。③ タオは首を振って「いい経験させてもらったよ。」と、唇の端を持ち上げた。笑ったのだと思う。タオんちのおじさんも、男の子は仕方ないよなあ、とにこにこ笑っていた。

タオの家は本だらけだった。本棚に入りきらない本が、そこらじゅうに無造作に積み重ねてあった。ここだけ別世界のように、おれはちよつと興奮した。夢中で眺めていたら、おじさんが、

「読みたいものがあつたら持っていっていいよ。」と声をかけてくれたけど、そもそもどれが読みたい本なのかすらわからなかった。

帰り際、おじさんが、

「タオとまた遊んでやってください。」

と急にかしこまって言い、④ おれたちはへどもどして頭を下げて、タオの家をあとにしたのだった。

「孝俊、ちゃんとタオに謝るまでおれは許さん。命にかかわることだ。」

タオの家からの帰り道、保生が厳しい口調で孝俊に詰め寄った。こんな保生を見るのははじめてだった。これまでも孝俊はどこか、おれと保生を子分のように扱っていたし、リーダーシップのある孝俊の言うことは、おれたちも自然と受け入れる態勢になっていた。孝俊に面と向かって歯向かうなんて、これまで一度もなかったことだ。

「……冗談のつもりだったんだけどよ。」

父ちゃんに殴られて目の下を紫色にした孝俊が、ぼそりと言う。

「冗談ですむか。⑤ わかってただら。」

保生の言葉に孝俊は黙っていたが、保生はかまわず続けた。

「そもそもお前の考え方におれはついていけない。新しく来た人がなんで悪い。ここに住むんだよ。天徳の人間はどんどん減ってる。感謝するんじゃないかって、いじめるんか。おかしいだら。内地人も、本島の人間も、この人間もみんな同じ。差別するな。」

しばらくの沈黙のあと、孝俊が口を開いた。

「……天徳を勝手に荒らされてもいいんか。これまでの神事がなくなってもいいんか。」

「荒らされていいって言ってる。内地人が間違えるのは、決まりを知らないからさ。立ち入り禁止の場所とか、ここの決まりをちゃんと教えればいいだけさ。それもしないで文句だけ言うのはおかしい。」

「おばあちゃんが許さんからしうがないだろ。B カンバン ひとつ立てるのも、神様がいいって言わんし。」

「神様の答えを何年も待っている間に、なにも知らん内地人が来て問題になってるわけだろ。神様も大事だけど、生きてる人間がなにかするほうが大事っておれは思う。」

「保生はこの神様とか、おばあちをばかにしてる。」

「してない！ 逆、大事にしてる。」

今まで見たことのない、おれの知らない保生だった。保生はいつでも穏やかに笑っていて、争いごとを好まないし、小さい子や女子にだってやさしい。学校で先生に指されても、ぼけっとしていてしばらく気が付かないこともあるくらいなのんびりした男だ。

「征人はどう思う。」

孝俊に急に振られて、どう言おうかと一瞬悩んだ。孝俊の気持ちもわかる。孝俊は天徳島が大好きで、とても大事に思っているということはちゃんとわかっている。でも、それでも、今回の件は見逃がせなかった。

「……保生に賛成。」

孝俊の目つきが鋭くなる。

「そうか。確かに、タオのことはおれが悪かった。だけど、天徳のこととは話がべつ！」

「べつじゃない！」

保生が間髪を容れずに返す。

「もういい。おれが嫌なら、一緒に遊ばんくていい。」

孝俊が背を向けて歩き出した。

「待って。まだ話終わってない。」

保生の声を無視して、孝俊は自転車に乗って行ってしまった。保生と顔を見合わせる。

「なんでよー。」

⑥ 保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ。

保生と二人で、ぶらぶらと天浜まで自転車をこいでいった。

〈中略〉

いろんな感情がぐるぐると渦巻いていた。今ここで言葉にするのは難しかった。

「あ、あのさ、さっきの保生、かつこよかったよー。見直した。尊敬する。」

「どこがよー。なに言ってる。」

「このことちゃんと考えてるんだなって思ったさ。おれは保生の言う通りだと思っけど、孝俊も、あれはあれで天徳のこと考えてるんだよな。どっちもすごいさー。」

おれだけだ。おれだけ、なにも考えていない。早くこの島から出て、新しい景色を見てみたいと思っている。

「おれはただ、みんな仲よくしたいだけ。天徳のことなんて正直興味ないよー。でもさー、そのために、内地から来たタオがいじめられるんだったら、ここの問題を解決しないと。」

⑦ 保生の言葉に、自分でもわからないなが喉元をせり上がってきて、鼻の奥がつんとした。

(椰月美智子『14歳の水平線』による)

注 *1 内地人……天徳島の人から見て本州などに住む人を指す方言。

*2 神事……神に関して行われる儀式やしきたり。

(1) 線部①「その表情でまた孝俊がイラついたのが見てとれた」とありますが、なぜ孝俊は「イラついた」のですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア タオに声をかけて自分の仲間になろうとしたのに、タオが征人や保生の言うことばかりを聞いていたから。

イ 飛び込みは島の住人になることを意味する行為なのに、タオがその意味を理解しようとしていなかったから。

ウ 東京から移住してきたことを持ち出してタオにいやな思いをさせようとしたのに、タオが平然としていたから。

エ いっしょに海へ飛び込む遊びをしようとタオに声をかけたのに、タオがその誘いに全く乗ってこなかったから。

(2) — 線部②「保生が叫ぶ。長い時間に感じられた。突然、盛大なしぶきが上がり、タオが浮かんで、また沈んだ。大きなしぶきが立つ。おぼれているのだ」とありますが、ここからは征人のどのような様子がわかりますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 孝俊の軽はずみな行動によって深刻な事態が引き起こされるとは思ってもいなかったもので、冷静に判断することができない様子。

イ 島の人間ではないというだけでタオを憎む孝俊が、命に関わるむごいしうちをしたことに恐ろしくなり、立ちすくんでいる様子。

ウ すぐにタオを救うために海に飛び込もうとしたが、保生の気迫と叫び声に氣後れしてしまい、すぐに行動を起こせないでいる様子。

エ 恐れていたことが実際に起こってぼう然としており、目の前の出来事一つひとつを受けとめていくことでせいっぱいである様子。

(3) — 線部③「タオは首を振って『いい経験させてもらったよ』と、唇の端を持ち上げた」とありますが、ここでのタオについて説明したものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 征人たちに感謝し、今後もこの島で様々な経験を積んでいきたいという気持ちを伝えようとしている。

イ 征人たちの謝罪を受け入れ、今回のことをとがめるつもりはないという気持ちを伝えようとしている。

ウ 皮肉をこめた言葉で征人たちを非難し、まだ許す気にはなれないという気持ちを伝えようとしている。

エ 征人と保生は許すことができても、頭を下げただけの孝俊は許せないという気持ちを持ちを伝えようとしている。

- 9 -

(4) — 線部④「おれたちはへんどとして頭を下げて、タオの家をあとにしたのだった」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア おじさんが自分たちを誤解していることがわかって、いこちの悪い気持ちになつたから。

イ タオと何を話していいかわからないのに、どう遊べばいいのか見当もつかなかったから。

ウ 本がたくさんあるタオの家は別世界のように、緊張のあまり何も考えられなかったから。

エ 予想もしていなかったおじさんの言葉と態度に、どうしたらよいかわからなくなつたから。

(5) — 線部⑤「わかってただら」とありますが、何をわかっていたというのですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア むりやりタオを飛び込ませたことが伝われば、父親に殴られるに違いないこと。

イ 転校生をいじめても、天徳島の伝統や神事を守っていくことにはならないこと。

ウ 海で危険な行動をとることは、命に関わる重大な事件を起こす可能性があること。

エ フィンがないと泳げないタオを海につき落とせば、おぼれて気絶してしまうこと。

(6) — 線部⑥「保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ」とありますが、保生はどんなことを悲しんでいるのですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 非を認めてきちんとタオに謝ってほしかったのに、孝俊が内地人に対する自分の考えを曲げようとしていないこと。

イ 自分も孝俊と同じように天徳島の神様や決まりを大事に思っているのに、孝俊がその気持ちを理解してくれないこと。

ウ 孝俊が、いつも親しく遊んでいる自分たちやタオのことよりも、島の神様やおばあちの方を大事に思っていること。

エ リーダーシップのある孝俊と仲違いしたいわけではなかったのに、孝俊から一方的に絶交を言い渡されてしまったこと。

- 10 -

(7) — 線部⑦「保生の言葉に、自分でもわからないなにかが喉元をせり上がってきて、鼻の奥がつんとした」とありますが、ここでの征人について説明したものととして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 自分とは違い天徳島の問題を真剣に考えて解決しようとしている保生の姿に、強く心を打たれている。

イ タオがこのままいじめられるのは見過ごせないという保生の友情のあたたかさ
にふれ、感動している。

ウ 天徳島のことを一番考えていると思っていた保生の、「正直興味ない」という
言葉にがっかりしている。

エ みんなと仲良くしたい一心で孝俊に歯向かった保生に対し、何の手助けもしな
かったことを後悔している。

(8) 征人の人物像として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 友達の言動に対する自分の思いを率直に伝えることにはためらいがある。天
徳島の外の世界へ強い憧れをもっている。

イ 友達どうしの争いごとには巻き込まれたくないと思っている。天徳島がさびれ
つつあるという事実から目を背けている。

ウ 友達に自分のように扱われることに不満をもっている。天徳島を大事に思っ
ていないことに後ろめたさを感じている。

エ 友達とは表面的なつきあひしかできずにいる。天徳島の古くさいしきたりが嫌
で、一刻も早くこの島を出たいと思っている。

(9) 文章中の A ケハイ・B カンバン を漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点
画もきちんと書くこと)

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、数字は段落番号を示します。

① インフルエンザという病気があります。冬から春先にかけて流行し、高い熱や頭痛、
関節痛などの症状が出る病気です。おそらくほとんどの人が知っているのではない
でしょうか。実際にかかったことのある人や、かからないように予防接種を受けたこ
とのある人も多いかもしれません。

② ところで、このインフルエンザ、怖い病気だと思いますか。

③ 怖いと思う人もいるでしょう。実際、厚生労働省によると、日本では二〇〇〇年以
降、インフルエンザを直接の原因とする死亡者が毎年二百人から千八百人は出ている
とされます。また、インフルエンザの流行を直接もしくは間接の原因として死亡した
人の数を推計すると、年間一万人に上るとも言われています。

④ インフルエンザはたびたび世界的な大流行を起こしてきた病気としても知られてい
ます。「スペイン風邪」と呼ばれた一九一八年から一九九年にかけての流行では、日本
で四十万人近く、世界全体では四千万人から一億人の死亡者が出たとされます。そ
の後、一九六八年にも「香港風邪」と呼ばれる流行が起きました。また、将来新型の
インフルエンザが現れた場合には、人の側に免疫がないことなどから、「スペイン風
邪」や「香港風邪」のときのような大流行が起きるのではないとも言われています。

⑤ 一方、インフルエンザをそれほど怖いと思っていない人もいます。たしか
にインフルエンザは、かかったとしても百パーセント死に至る病気ではありません。
予防接種も治療薬もあるので、予防や治療のできない難病というわけでもありません。

⑥ もとより、インフルエンザと普通の風邪をはっきり区別していない人もいるのでは
ないでしょうか。「高い熱が出たりしてしんどいけど、寝ていればそのうちに治る」
と思っている人もいるかもしれません。私自身、インフルエンザが流行っているのに、
きちんとがいをしなかったり、予防接種を受けなかったりしたこともありました。

⑦ このように、インフルエンザのことを怖いと思う人もいれば、それほど怖いと思っ
ていない人もいますでしょう。そのことから、^①病気の捉え方が個々の人によって違
うことがわかります。しかし、病気の捉え方は個人によって異なるばかりでなく、社
会によっても違う場合があります。

⑧ a 蚊が媒介するマラリアという熱病があります。私は南太平洋のヴァヌアツ
や東南アジアのミャンマーといった国々で、青年海外協力隊の隊員や国際協力機構
(JICA)の専門家として、その対策活動に携わってきました。

⑨ 世界保健機関(WHO)の情報によると、マラリアは二〇一三年には熱帯地域を中心に世界で年間五十八万人以上もの人々のいのちを奪^{うば}っており、その大半は五歳以下の子どもたちであるとされます。このように、子どもを中心におびただしい数の人々を死に追いやっていることから、マラリアは国際社会のなかできわめて重大な病気の一つと位置づけられてきました。国連が二〇〇〇年に採^{さい}択したミレニアム開発目標(国際社会が二十一世紀に協力して達成すべき目標を定めたもの)のなかでも、エイズなどとならんでこの病気をなくしてゆくことが、大きな目標の一つに挙げられています。

⑩ マラリアには予防接種はありません。ただし、治療薬があるので、かかったとしても治すことができます。だから、インフルエンザと同じように、治すことのできない難病というわけではありません。b、私にはインフルエンザよりもマラリアの方が怖い病気のようにみえます。

⑪ 実際、マラリアは多くの社会で怖^{おそ}ろしい病気と捉えられてきました。マラリアはもとと古いイタリア語で、「悪い」を指す「マル」と「空気」を指す「アリア」を組み合わせた語です。イタリアには今はもうありませんが、かつてはマラリアの感染^{かんせん}が起きていました。そして、人々はそれを無視できないものとみなし、「悪い空気」にあたるとかかってしまうと考えたわけです。

⑫ 同じように、この病気を重大なものと捉え、それにかからないように工夫しながら生活していた人々の例は、世界各地から報告されています。ネパールのある地域の人々は、川に近い標高の低いところに村をつくと、水田をつくるのには便利な反面、病気が流行^{はやり}るので、高いところに村をつくるようにしていたそうです。村と水田の間には標高差があるので、上り下りするが大変です。しかし、標高の高いところには川で繁殖^{はんしよく}するマラリアの媒介^{まがい}蚊^いがいないので、マラリアにかかる心配もありません。この病気が蚊によって媒介^{まがい}されることを人々が知っていたかどうかはわかりませんが、川の近くの低いところに村をつくと病気にかかりやすくなることは、経験として知っていたのです。

⑬ 一方、これとは対照的な例もみられます。マラリアの感染^{かんせん}が頻^{ひん}繁^{はん}に起きていたアメリカのミシシッピ川周辺や西アフリカのリベリアなどの人々の間では、マラリアは怖い病気どころか、そもそも病気としてさえ捉えられていなかったそうです。これらの地域では誰も^{だれ}もがかるありふれたものだったので、病気というよりもちょっとした不調のようなものとして位置づけられていたようです。

⑭ マラリアの感染は、私がマラリア対策や研究などでたびたび訪^{おとず}れてきた南太平洋の島国ヴァヌアツでも、頻^{ひん}繁^{はん}に起きてきました。ところが、それにもかかわらず、現地の人々の使っている言語のなかには、マラリアに相当する語彙^{ごい}がないという興味深い例がみられます。マラリアの症状である発熱や頭痛、悪寒^{おかん}などを指す語彙はあるのですが、病名を表す語彙がないのです。どうしてなのか定かではありませんが、先に紹介^{しょうかい}したアメリカや西アフリカなどの例のように、多くの人がかかるので病気を捉えられず、そのために病名もできなかったのかもしれない。

⑮ このように、病気の捉え方は個人によってだけでなく、社会によっても違う場合があります。これに対して、医学では、むしろそうした差異を超えた共通のことがらに注目します。マラリアに関して言うと、それにかかったすべての人に共通して認められること、たとえば病原体であるマラリア原虫^{もと}や、マラリア原虫がハダダラカという蚊によって人から人へと媒介^{まがい}されてゆく感染メカニズムなどに注目するわけです。そして、それらの知識に基づいて、各種の予防法や治療薬の開発などが行われてきました。その結果、多くの人々がマラリアを防いだり、治したりすることができるようになりました。これは医学がもたらした大きな成果と言えるでしょう。

⑯ ただし、医学の病気の捉え方は、病気にかかっている当事者の捉え方と重なっている場合もある反面、異なっていることもあります。先に紹介した、マラリアを病気とみなさず、ちょっとした不調などと位置づけていた社会の例が、まさにそれにあたります。また、別にマラリアでなくとも、「検査では異常がみつからなかったのに、どうも体調が悪い」とか、逆に「検査で異常がみつかったけど、自覚症状もなくピンピンしている」といった例は、それほど珍^{めづ}らしいことではないでしょう。いずれも個人の病気の捉え方と病院での検査などに基づく捉え方が異なる場合です。

⑰ 私が専門としている文化人類学では、以上のような個人や社会による病気の捉え方の違い、あるいは個人や社会の捉え方と医学の捉え方の違いに注目します。そして、医学的に捉えた場合の病気を「疾病」、個人や社会からみた場合の病気を「病い」と呼び、区別しています。そうすることで、医学的な捉え方とは異なる、個人や社会による病気の多様な捉え方を、たんに間違っているものや劣^{おと}っているものなどとして評価するのではなく、それ自体として尊重しようとするともに、当事者である個人や社会の側からみた病気のあり方や位置づけなどを深く理解しようとするのです。

⑱ 子どものいのち(ひいてはすべての人のいのち)を守るために、病気や障がいなどの問題と向き合うときに必要なことは何でしょうか。さまざまなことがあるでしょう。しかし、とりわけ欠かせないものの一つに、次のようなことがあると思います。

それは、いのちの担い手である一人ひとりの子どもの見方や考え方を尊重し、そのニーズ（求めていること）などを当事者の子どもの目線に寄り添って理解しようとすることです。

⑲ 当事者の子どもになりきれない以上、ほかの人がその子どものことを百パーセント理解することなどおそくできないでしょう。けれども、子どものいのちを守ろうとして行われていることが、当の子どもからみた場合、守ろうとする側の価値観や考え方などの押しつけになってしまっていないともかぎりません。子どもの側にとって「小さな親切、大きなお世話」になってしまっているような事態です。言葉で意思などを確認することの難しい赤ちゃんや小さな子ども、言語コミュニケーションの面で障がいを抱えた子どもの場合、そうした事態が起きる可能性はより大きくなるかもしれません。そうしたなかで、子どものニーズなどを子ども目線で理解しようと努めることは、「小さな親切、大きなお世話」になってしまいうことを防いだり、万一そんな事態が起きたとしても早い段階で気付き、軌道修正したりするために不可欠なことです。

⑳ 子どものいのちを守ろうとして病気と向き合うときにも、同じことがあてはまります。先に文化人類学では、病気を「疾病」と「病い」に分けて位置づけていることに触れました。それとの関連で言えば、子どもの病気を「疾病」の面からだけでなく、「病い」の面からも理解しようとする必要があります。つまり、当事者である個々の子どもからみた病気のあり方にも十分注意を払う必要があるということです。これは、子どもの目線に寄り添って病気と向き合うことと同じです。そうすることとで、子どものニーズなどを適切に理解するための道が自ずと拓けてくるはずで

（道信良子編著『いのちはどう生まれ、育つのか―医療、福祉、文化と子ども』

による。なお、問題の都合上、本文中の出典等を省略しています。）

注 *1 媒介蚊……人から人へと病気をうつす蚊。

*2 語彙……ここでは「言葉」の意。

*3 マラリア原虫……マラリアの原因となる微生物。

(1) a と b にあてはまる言葉を、それぞれ次の中から選びなさい。

ア あるいは イ しかし ウ さらに エ そして オ たとえば

(2) 線部①「病気の捉え方が個々の人によって違う」とありますが、このことについて説明した次の文の [] に適切な言葉を補いなさい。ただし、十五字以上二十字以内（句読点は字数にふくむ）で答えること。

インフルエンザという病気について、[] と
いう二つの理由から「怖い」と思う人もいれば、百パーセント死に至る病気ではないという理由から「怖くない」と思う人もいる。

(3) 線部②「この病気を重大なものと捉え、それにかからないように工夫しながら生活していた」とありますが、どのような工夫ですか。最も適当なものを次から選びなさい。

ア 病気を流行させないようにするため、川から離れたところに住むこと。
イ 病気を媒介する蚊を避けるため、村と水田の間に標高差をつけること。
ウ 悪い空気にあたるのを防ぐため、標高の高いところに村をつくること。
エ 感染する確率を下げるため、住まいから離れた場所に水田をつくること。

(4) 線部③「このように、病気の捉え方は個人によってだけでなく、社会によっても違う場合があります」とありますが、この文章ではどのような例を挙げて「社会によって違う場合」を説明していますか。それを説明した次の文の I ・ II にふさわしい語句を、I は五字以上十字以内、II は十五字以上二十字以内でそれぞれ文中から抜き出さない。

マラリアを、 I と捉える社会と、 II 社会の例。

(5) —線部④「子どもの目線に寄り添って病氣と向き合うこと」とありますが、そのためにはどのようなことが必要ですか。次の中から最も適当なものを選びなさい。

ア 当事者が自らの体調をどのように感じているかに着目するとともに、病院での検査結果に基づく診断^{しんだん}を重視していくこと。

イ 子どもを守ろうとする側の価値観を押しつけないようにするとともに、子どもに共通する病氣のあり方に注意していくこと。

ウ 大人が子どもに余計な世話をやかないようにするとともに、個人や社会による病氣の捉え方にとらわれないようにすること。

エ 子どもによって違う病氣の捉え方を尊重するとともに、当事者以外の人の見方や価値観で病状を判断しないようにすること。

(6) 各段落の役割を説明した次の文の中から、適当でないものを一つ選びなさい。

ア ②段落では、③段落以降でインフルエンザに対する見方の違いを述べるために、それにつながる疑問を示している。

イ ⑪段落では、⑩段落で示した自らのマラリアについての見方を受けて、同じ見方をしてきた社会の例を紹介している。

ウ ⑬段落では、⑮・⑯段落で述べた医学的な病氣の捉え方の特徴^{とくちょう}について、新たな観点からくわしく説明している。

エ ⑲段落では、⑲段落で示した病氣や障がいへの向き合い方について、慣用表現を交えながらその必要性を論じている。